

## 【食の温故知新】

近代社会に仲間入りして一五〇年。わが国の食文化は、どんな変遷をたどったのでしょうか

昨年（二〇〇三年）は、徳川家康が江戸に幕府を開いてから四百年目にあたる年でした。「江戸開府四百年」をテーマに、各地でさまざまなイベントが行なわれ、多くのメディアも特集を組み、「江戸時代」を見直す動きが活発な一年でした。

そして今年も、「日米和親条約」締結百五十周年の年。当時（一八五四年）のわが国は、「脱亜入欧」を合言葉に西欧近代国家への仲間入りを目指した、開国の第一段階の時期でもありました。

しかし、一方で、十八世紀のはじめには人口百万を超える世界第一の巨大消費都市に発展していた江戸は、その繁栄ぶりが西欧諸国に勝るとも劣らぬものと、諸外国からの評価を受けていたことも見逃せない事実です。その江戸では外食の習慣が生まれ、日本各地からの食文化が出会い、互いに交流と融合を重ねた結果として、わが国独自の食文化、「和食」の完成をみていたのです。

「SUSHI」や「TEMPURA」に代表される「和食」が世界の食卓を賑わすまでに普及している時代ですが、開国を境に、わが国に新しい文明・文化としてもたらされた諸外国の食文化が、果たしてどのような内容と、いかなる影響を「和食」に及ぼしたのでしょうか。

日米和親条約百五十周年を機に、文明開化から今日までのわが国の食文化の変遷を、多面シリーズとして企画しました。

その第一回目は、お二人の研究者による、「異国食の受容と変容―新たな食文化の受け入れと普及―」世界の食の交差点―アメリカの食文化見聞録―です。



図版説明：文久元年（1861）頃の英国スタンフォード製日本列島地図  
YEDO(江戸)は日本の首都で、250万の住民がいる。また、MEACO(京都)には5万の住民と、E・ケンペル（『日本』—1733年—の著者）によれば、6千を超える寺院があり、日本の総人口は2500万とも言われている、との記述がある（古地図史料出版株式会社所蔵）